

Title	引用されたことばと擬声・擬態語と：「引用」の位置づけのために
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	詞林. 2 P.52-P.67
Issue Date	1987-11-23
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/67245
DOI	10.18910/67245
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

引用されたことばと擬声・擬態語と

—「引用」の位置づけのために—

1-1 のつけから妙な話だが、例えば、

①・a 兎がピヨン。

②・a カラスがカア。

などといった表現は、そのみで自立した一センテンスと考えることが許されるのではないか。言いたいことは、右が、

①・b 兎がピヨンと跳ぶ。

②・b カラスがカアと鳴く。

といった文の傍線部省略なのだということを言わないで、それ自体が固有の原理によって成り立っている一つの文だと言ってよいのではないかということである。

もちろん、これは「文」というものをどのように定義するかという問題とも密接にかかわってくる。

例えば、文は言い切りの述語によって完結するという通念がある。名詞文でなければ、述語となるのは用言である。その観点からすれば、「ピヨン」「カア」は用言ではないし、もちろ

藤田 保 幸

ん名詞でもない(注一)。擬声語・擬態語と呼ばれたりするけれども、品詞論的位置づけは定かではない。強いて言えば副詞(の一部分)となろうか。ともかく、これを以って述語とはみなしにくい。従って、aはbの省略形だなどという説明が出てくる。けれども、そうした見方はあたらないものと思う。

その傍証とも言えそうなことを一つ挙げるなら、aのような表現は幼児の言葉には頻繁に出てくるタイプのものであろう。それ故、童謡などにもしきりに用いられる。

③ 自動車、プー。

④ 一羽のカラスがカーアカア。二羽のニワトリ、コケッコ。……

してみると、bのような構造が先にあって、そこからaが派生するという見方は疑問であるだろう。

山田孝雄は、「文」を、主位観念と賓位観念が統覚作用によって統一されたものの言語的表出である「句」が、現実に運用

されたものだとする(注二)。筆者の理解にひきつけて言い直すなら、「句」とは、一つの事柄を描くものである。従って、基本的には、事柄を、対象(モノ)の側面と作用・状態(サマ)の側面に分析し統合して言語に表出したものが「句」であって、それが一つで成り立つのが「単文」、複数集まって成り立つのが「複文」ということになる。

こうした、我々が文において何を表現するかといった本質論的な問題をも念頭においてみてみるなら、①・aや②・aも、自立した「文」と呼んで何らさしつかえないように思われる。①・aを例にすれば、事柄の対象面「兎(が)」と作用面「ピヨン」が結びつけられ、一つの事柄(兎の跳躍)が描出されている。「兎がピヨン」は一つの「句」であり、それが運用された単文である。従って、①②・aと①②・bとは別個の原理によって成り立つものと思われる。それは、例えば、

①・a *兎が昨日ピヨン。

①・b 兎が昨日ピヨンと跳んだよ。

のような点にもうかがわれる。つまり、bの構造が過去の事柄の表現ともなり得るのに対し、aの構造は、基本的にはそれが難しい。つまり、臨場的に事柄に向かい合うような場合にしか用いられず(注三)、観念的に過去の事柄を描くようなことは難しいのである。

このように、aは独自の原理に拠って立つ自立した一文である。この稿の考察は、そうした独自性の検討を最初の手掛りと

して出発することになる。

1-2 次の二文は同じ事柄(兎の跳躍)を描いたものであり、その点では同義といえる。

①・a 兎がピヨン。

①・c 兎が跳ぶ。

では、この両者の相違はどういう点にあるのだろうか。こうした点から、aの表現を支える原理を考えてみたい。

形の上での明らかな違いは、cでは「跳ぶ」という動詞が述語に立ち、aでは「ピヨン」という所謂擬態語が述語なら述語といえる位置を占めていることである。従って、相違は両者の述語(以下aについてもこう呼ぶことにする)の表現性に根ざすものと見られる。

我々は、cのような文を通常の文としてイメージしている。

そこで、こちらから検討したい。この「兎が跳ぶ」のような場合、述語面に関しては、「跳ぶ」によって喚起される属性概念を現実の事柄(あるいは、心中にある描きたい事柄)に結びつけることによってそれを描いているのだといえよう。

ここで注意しなければならないのは、記号の恣意性という基本公理である。この「跳ぶ」のような通常の記号の場合、「トブ」という表現形式(音形)と「跳躍」という属性概念(意味)との間には何らの必然的関係はない。その結びつきは全くの社会的な約束事であって、それを我々は内面化している。

「跳ぶ」という記号を使って現実を描くことは、「トブ」と

いう表現形式の喚起する抽象的な屬性概念と現実とを同定することに他ならない。その同定の確実さが問題となる等の場合には、山田文法流に言えば複語尾を分出して、「跳ぶだろう」「跳ぶらしい」「跳ぶにちがいない」等となるとみることもできよう。また、そうした同定という観念的営為は、現実に対してばかりでなく、例えば過去の現実に向けても行なわれよう。「跳んだ」のような過去時制が分化するのはそれ故である。

以上、通常の言語記号が述語にくる①・cのような場合の用言述語の表現構造を考えてみたが、それに對し、①・aの「ピヨン」のような擬態語の場合は、大きく趣きを異にする。

「兎がピヨン」「カラスがカア」といった場合の「ピヨン」「カア」のような擬態・擬声語の特性は、何より記号の表現形式と内容(意味)のある程度の有契性(必然的結びつき)である(注四)。これらは、現実の音声的イミテーション(模造物)と言つてもよい。だから、「ピヨン」と表現することによって、ある程度はその表現形式(音形)に支えられて直接に、そのように跳ぶイメージがそこに提示される。いわば、そのように跳ぶイメージが(擬似的にであつても)そこへもち出されることになる。従つてまた、「ピヨン」は、そのように跳ぶということ——そうした現実の言語的模造物であることにおいて、それ自体で「跳ぶ」という意味を合意しているといつてもよいだろう。

この点、更に極端な類例をあげると、言わんとすることが実

感されよう。次の例は、完全な言語表現ではない。言わば、言語表現と非言語表現の混交したものが、現実を擬似的にでも直接さし出した表現であり、その点で基本的に①・aと同じである。

⑤ 智子・合格発表はどうだったの？

春樹…まさかと思つたけど、全員合格だよ。卓郎も明浩

も合格だ。志津子なんか……

——と言つて、うれし泣きする仕草をする。

もちろん、これ(傍線部のような半ば言葉半ば身ぶりのような表現の仕方)は、「文」とはいえないけれども、表現の構造としては——事柄をモノの側面とサマの側面とに分析して統合するという形をとっている点で——「文」と同様である。

ただ、典型的な「文」と異なるのは、事柄のサマの側面を「うれし泣きした」といった、表現形式と内容(更には現実)との間に有契性を持たない記号によって示すのではなく、実際に「泣く」動作をしてみせることによって、その現実そのものを(マネという擬似的な形であつても)直接さし出してみせて、伝達を行っている点である。そして、もちろんその仕草はいろいろな表現や手ぶり・身ぶりといった具体的な形をとるだろうけれども、それが「泣く(うれし泣きする)」「仕草であり、そのことにおいて、それ自体が「泣く(うれし泣きする)」「を意味している」ということは、よもや異論のないところであろう。

仕草のような現実のイミテーションは、もちろん、言語にそ

のまま乗らない。⑤のような表現は極めて特殊なものであろう。しかし、言語は音声的な表現手段に依拠するものだから、音声的な現実のイミテーションは、言語表現に無理なく乗ってくる。故に、①・aや②・aのような表現が成立する。

これらでは、「うれし泣き」の仕草がそれ自体で「泣く」という行為を意味したのと同様、「ピョン」「カア」が、跳ぶ動作・鳴く声を模した擬態語・擬声語であることにおいて、それ自体で「跳ねる」「鳴く」という意を含蓄する。その点からも、やはり「兎がピョン」を「兎がピョンと跳ぶ」という文にひきつけることは不要なのである（「ピョン」の中に既に「跳ぶ」ことが含蓄されるから）。aのような構造を支えているのは、「ピョン」や「カア」の含蓄された述語的意味だと言ってもいいかもしれない（注五）。

以上、①・aは①・cと異なり、述語として現実そのものを（擬似的にでも）直接もち出してくる表現である。現実を直接もち出すということから、こうした表現の臨場性・直接性（リアルさ・生々しさ）が生じるのであり、また、だからこそ「兎がピョン」には複語尾も時制も分化しない。そして、擬似的にでもある現実を直接もち出している中に、通常の用言述語などによってパラフレーズされる意味は既に含蓄されているのだということは、ここで繰り返しておく必要があるだろう。

なお、擬態・擬声語は、現実を擬似的にでもそのまま持ち出すものであることを述べた。これらは言わば音マネでサマ的な

性格が強いから、①・aや②・aのように述語の位置に立つてサマの表現ともなるが、次のように、一つの事柄全体を、それのみで直接にもち出すような場合もあり得る。

⑥ だんだん日もかけて参りました。

カア、カア、カア。

「ああ、カラスももうねぐらに帰るんだナア」とおじいさんは思いました。

これなど、「カア、カア、カア」という擬声語によって、そんな鳴き声の生起という事柄（更には、そんな声で何かか鳴いたという事柄）全体を直接的に表現したものとすることができよう。こうした点にも多少く留意しておくことにする。

2 以上述べたことは、以下の「引用」に関する議論にも基本的な見通しを与えるものである。ここでは、周辺の現象から入り、次節以下で統辞的な「引用」として扱うべき主要なものを論じることにする。

「引用」的現象の用例を広く見てみると、次のような一見妙な例が目についた。

⑦ a ヒゲの男が「オイ、静かにしろ」

⑧ a バタバタと手が進み、2四飛を見て杉本は「負けました。」

（大阪新聞 一九八七、八、二八「将棋観戦記欄」）

⑨ a 妓が戸田をゆり起こすと、与吉が、「すまねえが、下へ行って熱い酒をたのむ。」

こうした例も、従来正しい位置づけを与えられてきたとは思われない。おそらく、これらに関しては、

⑦・b ヒゲの男が「オイ、静かにしろ」と言った。

⑧・b ……杉本は「負けました」と言った。

⑨・b ……与吉が、「すまねえが、下へ行って熱い酒を

たのむ」と言った。

の傍線部の省略といった説明がなされるだろう。けれども、そうした説明が当を得ていないことは、「兎がビヨン」を「兎がビヨンと跳ぶ」の省略と説明することと同断だと思われる。

早い話が、「兎がビヨン」の場合と同様、aのような表現は、bの表現と異なり、はつきり過去時制をとって過去の事柄を描く場合には用いることができないう点でも、両者の構造の異質性は明かである。

⑦・a* ヒゲの男が昨日「オイ、静かにしろ」

⑦・b ヒゲの男が昨日「オイ、静かにしろ」と言った。

⑦⑧⑨のaのような表現が理解され、成り立つのは、まず何より我々が、傍線部は引用された語句だと直観するからである(注六)。「ヒゲの男が」「杉本は」「与吉が」に対し、引用された語句が相関していることが、この構造を成り立たせているということになる。

引用された記号列は、通常の記号列とはもちろん異質である。その異質性とは、要するに、現実の段階で既に発話されたもの

を写しとってきたものであること、その意味で現実のコピーであり、既にある現実を直接持ち込んできたものだという点であろう。その点で、「ビヨン」「カア」といった擬態・擬声語と同様なのである。

そして、「兎がビヨン」という場合、「ビヨン」が跳ぶ動作を直接写して持ち出すものであることにおいて、それ自体で「跳ぶ」という意味を含蓄するのと同様、例えば、「ヒゲの男が『オイ、静かにしろ』」という場合、「オイ、静かにしろ」は、現実の発話を直接引用するものであるということにおいて、「言う」という意味をそれ自体が含蓄するものである。この点は、ここで強調しておきたい。

従って、⑦⑧⑨・aも、①②・aと同様の原理に支えられた自立した構造である。⑦⑧⑨・bはその意味解釈を敷衍して示すものであっても、bを前提にaを考えなければならぬものではないと考える。

以上の議論から、この稿の一つの主張を示しておくなら、次のようなことである。

・引用されたことばは、「兎がビヨン」「カラスがカア」の「ビヨン」「カア」のような擬態語・擬声語がそれ自体で既に「跳ぶ」「鳴く」のような述語の意味を含蓄するのと同様に、それ自体で「言う」のような述語の意味を含蓄するものである。そうした含意された述語の意味に支えられて、擬態語・擬声語も引用されたことばも、ある種の述語性を帯び得るも

のである(注五)。

なお、先に⑥の例でも見たような擬態・擬声語の場合とも並行して、引用された語句が述語性とどまらず一まとまりの事柄全体の表現(句)という性格を帯びることがあることは、意外に注意されていないのではないか。

⑩ 阿部駿河守が入ってくると、誠一郎は黙礼した。

「島津に不穩の動きがあるとはまことか」

「さようにござりまする」

.....

このように、会話文が順次引用されていくことのみで物語が進行していくということは、もちろん、こうした発話が生じしなというところが、引用であることにおいて含意されるからに他ならない。そうした含意があるから、これらの会話文の一つ一つは、事柄の表現である。そうでなくては、事柄の積み重ねとしてのストーリーが、こうした引用された語句を並べることによって展開していくはずはないのである。引用されたことばのこうした性格についても、ここで併せて注意しておくことじたい。

3-1 右に、引用されたことばの一見特殊な用法を見てきたが、「引用」ということを筆者は、狭義に文法論におけるものとしては、引用句「〜ト」と述部との相関として考えてきた(注七)。すなわち、典型的には、次のような引用句「〜ト」が(しばしば「引用動詞」などと呼ばれる)発話・思考・認識

意の述語と結びつく場合である。

⑪ 彼は「おはよう」と言った。

⑫ 彼は「しまった」と思った。

また、次のような、発話や思考・認識の意ではない述部と結びつく例も視野に入れて、これも「引用」と考えている。

⑬ 彼は「おはよう」と入ってきた。

⑭ 彼は「しまった」と引き返した。

典型的なものもそうでないものも含めて、引用句と述部との相関による「引用」を、文法論としてどのように位置づけるかについては、従来いくらかの見解が示されてはきたが、なお全般にわたって十分に説得力のあるものが提示されているとは思われない。

この稿で書いておきたかったことは、それに対する筆者の目下の見通し、仮の答案である。筆者自身の目下の見方では、「引用」の統辞関係は、一種の情態副詞的連用修飾ととらえていくのが基本的には一番妥当なように思われる。

以下では、⑪⑫のような典型的なものをまず論じ、続いて⑬⑭のような例にも言及することじたい。

3-2 副用語の研究の進展とともに、所謂「連用修飾」の内実が整備され、そのうちの副詞的連用修飾の関係についても、その統辞構造に託された内的な意味構造の分析が進みつつある。ここでは、そうした研究の一つとして石神照雄(一九八三)を手がかりに考えてみたい。石神は、従来の、単に修飾句が被修

飾句を意味的に限定するといった把握を一步進めて、その内的な意味構造に言及している。ここでは、直接関連のある、情態性の連用修飾に関する分析を引くことにする。

石神は、「太郎があわただしく食べる」「5としてゐる」という文を例として、こうした連用修飾を、「素材としてのコト(事象)をモノ(実体)とサマ(属性)とに分析し、これを統一することによって表現する方式の中で、サマ(属性)を二重的にとらえるものである」とする(注八)。

ヘコト(事象)把握の言語上への基本的な実現は、モノを主語、サマを述語とする主語―述語相関の句である。5では、サマの面が立体的に分析され、

5 太郎が食べる。——太郎があわただしい。

というように、二句が同時に相関するという内部構造をもつものである。ここでは、サマが時間的に「食べる」、超時間的に「あわただしい」と質を異にして把握されている。〈(注八)

事柄は、対象(モノ)がなんらかのあり方(サマ)においてあるという形で成り立つ。その、同じ一つのサマの側面も、いろいろな視点から把握され得る多面性をもつものであろうが、情態性連用修飾とはそうしたサマの二重的把握であるという見方は、基本的には首肯できる(注九)。

ただし、二重的把握といっても、それ自体が多様であることには注意しておいてもいいだろう。例えば、次の二文はかなり

近いことを述べたことになるが、とらえ方の質は正反対である。

⑮・a 太郎があわただしく食べる。

⑮・b 太郎がガサガサと食べる。

aでは、「食べる」ことの様態を「あわただしい」と抽象化したとらえ方で限定しているのに対して、bでは、それを具体的に示す形で限定している。この稿で立ち入る余裕はないけれども、二重的なとらえ方にどれほど多様なタイプがあるかを記述することが要請されよう。

右のbに近いものとして、先の①・bなども一つの典型的情態性連用修飾の構造といえるだろう。⑮として再掲する。

⑮ 兎がピョンと跳ぶ。

これも、もちろん二句の相関という内的な意味構造をもつものとしてとらえられる。この稿の分析から、次のように書くことができるだろう。

⑮ 兎が跳ぶ。——兎がピョン。

ところで、こうした把握が可能だとしたら、逆に、

⑯ 彼が言った。——彼が「おはよう」。

⑯ 彼が思った。——彼が(心ノ中デ)「しまった」。

といった二句の相関の内的構造をもつものとして、

⑯ 彼は「おはよう」と言った。

⑯ 彼は「しまった」と思った。

のような典型的な「引用」の構造を考へることができるとはでないか。「引用」をこうした連用修飾構造の一環としてとらえ

ることは十分妥当性のあることだと思ふ。

「石神は、「あわただしく食べる」について、修飾句「あわただしく」がサマを超時間的に描くとしたが、その点については、普通に情態性連用修飾と考えられる⑩のみならず、⑪⑫も同様な構造とみなされる。

すなわち、「兎がビヨン」「彼が『おはよう』」「彼が（心中で）『しまった』」のような構造では、既に見たように時制が分化しない。引用されたことばや擬声・擬態語をもち出すのは、臨場的な超時間性の表現であり、その点からすれば、「ビヨン」と同様、「おはよう」と「しまった」も超時間性の修飾句とみることができるのである。

そしてまた、1—2でも見たように、「ビヨン」も「跳ぶ」も事実としては同じサマを描くものである。しかし、前者はそれを擬似的にでも直接に持ち出して示すのに対し、後者はそれを抽象的な概念に結び付け、それを介して描き出すものであった。してみると、⑩の「ビヨンと跳ぶ」は、一つの事柄の同じサマの側面を、具体的な現実のもち出しと抽象描写というようにレベルをかえて二重に描き出したものといえる。⑪⑫のような「引用」の場合も、その点は同様なのである。「おはよう」という引用されたことばによって直接もち込まれる現実は、「言った」が指し示すものと同じである。従って、「『おはよう』と言った」のような構造は、生の現実（の模造）と、それを抽象化して描出する言葉というレベルの相違はあるものの、実質

としては等価なもの一對となった結びつきだといえる（注一〇）。そうした具体的現実と抽象的描出の二重性において発話・思维のサマを立体的にとらえるのが「引用」なのである。単に「おはよう」が「言った」の内容だといった把握のみでは、両者の記号としての質差の視点が欠け落ちる。

もちろん、⑪⑫のような典型例では、引用句の「おはよう」と「しまった」を述部の「言った」「思った」の内容と見る把握も十分自然である。それ故、「〜ト」は、内容として発話・思考を意味する述部動詞を補充する（頭在するかどうかは別として論理的には）必須の補語であり、動詞の意味によって予め共起の指定されているもの、すなわち「格」成分なのだといふ見方も、そうしたところから出てくる。例えば、仁田義雄（一九八二）では、「〜ト」は対象格と扱われている（注一一）。なるほど、⑪⑫のような典型的な「引用」では、「〜ト」は述語動詞と内容として強く結びつくものであって、格的な性格を帯びるけれども（注一二）、「〜ト」を本質的に「格」成分とやってしまうことは、いささか疑問に思う。一つには、等価一對の結びつきとみなされる「引用」は、⑪⑫のようなもの以外みられるのであって、この種の構造の「引用」に限っても、「格」といった把握ではカヴァーしきれないだろうと思うからである。例えば、

⑬ 善行が「ほんとにあいつめ」と言うと、和博が「なぐ〜」でやる」と続けた。

のような場合、「続ける」の意味によって共起が指定されている必須の補語（「格」成分）として、「ト」を考えることは難しかろう。（すなわち、「続ける」を発話等の語彙の意味をもった所謂「引用動詞」などとは考えにくいだろう。）けれども、「なぐってやる」と発話したことが、「続ける」ことなのだから、これは引用句と述部が等価一対の構造なのであって、その点、「引用」としては⑩⑪と同じ構造なのである。それを、一方は「格」の関係であり、一方は省略とか文脈的な臨時用法だとして例外視したとすれば、それは不当だろうと思う。筆者は、⑩も

⑩ 和博が続けた。——和博が「なぐってやる」の二句の同時相関の内部構造をもつものと考えて、⑩⑪更には⑫と同様に扱いたい。すなわち、和博（モノ）がなぐってやると発話する（サマ）という事柄の、サマの面を、一方ではその発話を直接もち出して臨場的・超時間的に示し、一方ではその発話を他者の発話に「続ける」と特徴づけて抽象的・時間性的に描出して、二重性的に描いたものとみるのである。

以上、典型的な「引用」及びそれと同構造のものについて、目下の統辞的位置づけの試案を示してみた。しかし、もう一つ、従来問題視されてきた厄介なケースがある。これを次節で扱うことにしたい。

3-3 先に掲げた例を、ここでもう一度掲げておこう。

⑩ 彼が「おはよう」と入ってきた。

⑭ 彼が「しまった」と引き返した。

これらは、「ト」が思考・認識・発話意の述部とは結びつかず、それ以外のさまざまな意味の述部と直接に結びつくものであって、その位置づけが問題視されてきた。

筆者は、目下のところ、なお考慮すべき点もあるが、こうした構造も情態性の連用修飾の一環として考えていくことができるとは思っていない。もちろん、大きな問題として、一般の情態性の連用修飾と違って、例えば、⑮の「おはよう」と「が入ってきた」の意味内容を限定しているとは、通常の意味では言い難い。ちなみに、柴谷方良（一九七六）は、⑬⑭のような構造をも副詞的修飾と考えているが（注二三）、「おはよう」と「など」を「ばたばたと入ってくる」の場合の「ばたばたと」のような物音的な副詞句とみなそうという趣旨には、遺憾ながら賛成しがたい。「ばたばたと」は単なる音を示すのではなく、それによってせわしい様子を示し、述語「入ってくる」の様態を限定するものだからである。

けれども、筆者は、⑬⑭と同様の情態副詞的修飾語の修飾構造があるということも積極的に認識する必要があるのではないかと考える。いくつか用例を掲げることにする。

⑮ 「仙一、学校の薔薇の花盗んだな」

夕闇の中で、父親の眼玉がぐるりと光った。

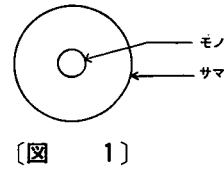
（上林暁「薔薇盗人」）

⑯ 町人らしい門人が、はごにごと道場の中へ入れてくれた。

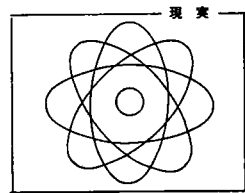
(池波正太郎「剣客商売」)
 ②〇……その向こうには町工場の汚らしい壁と屋根が黒々と
 躍っている。
 (福永武彦「樹」)

これらでは、例えば②の「ぐるりと」が「光った」の意味内
 容を限定しているなどとは言い難いだろう。「ぐるりと」は「
 光る」というサマとは併存するが別個の「回る」サマを示すも
 のであり、「ぐるりと光った」は決して同じサマを二重に分析
 したものだといえない。②〇も同様であろう。その点で、これ
 まで見てきた「ピョンと跳ぶ」「あわただしく食べる」などと
 は表現のしくみが異なる。

この相建を、仮に図解してみよう。



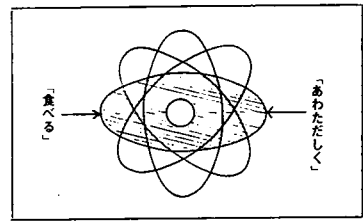
〔図 1〕



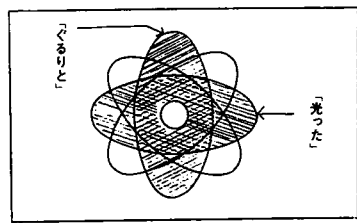
〔図 2〕

まず、事柄——あるモノ(対象)があるサマ(作用・状態)
 においてあることを、図1のように示そう。ところで、現実にお
 いては、あるモノが帯びているサマの側面というものは、多
 面的であり多様である。ある対象は、同時にいろいろなあり方

でこの世に存在し、そのいろいろなあり方の一つ一つが多面的
 であり得る。換言すれば、現実においては、モノは何重ものサ
 マを帯びて存在し、それらがいろいろな視点から特徴づけ可能
 であり得るのである(図2)。ところで、「太郎があわただし
 く食べる」のような場合は、その混然たるサマの側面のうちの
 一つがとり出され、異なる視点から特徴づけられたものといえ
 よう(図3)。



〔図 3〕



〔図 4〕

「太郎」は「食べる」のだし、その「食べる」ことについて
 「太郎」は「あわただしい」のである。ところが、「眼玉がぐ
 るりと光った」の場合には、これと異なり、その同一の場面に
 共存する別個のサマをとり出して、それぞれについて、「光っ
 た」「ぐるりと」として描き出したものといえる(図4)。「

眼玉」は「光った」のであり、また「ぐるりと」回っている。しかし、「光った」ことについて「ぐるりと」が「光った」を通常の意味で限定（様態規定）しているのだとは言えないのである。

従って、意味の構造からいえば、「眼玉がぐるりと光った」は、併存する二つの事柄の表現である。「ぐるりと」と「光った」は、一つのモノが帯びている二つのサマを並べてとり出したものといえよう（その意味においては、これも、サマの二重の把握ではある）。けれども、一方、統辞的な構造からすれば、超時間性の情態副詞が時間性の動詞述語にかかっていく、通常の情態性の連用修飾と同じ形をとったものであることは否定できない。よもや、「ぐるりと光った」を「ぐるりと回って光った」の省略と主張する人はいないだろう。そもそも、1-12に論じたように、「回って」のような意味は「ぐるりと」に含意されてしまうのである。そして、この「眼玉がぐるりと光った」のような表現が二つの事柄を描くものであるにしても、描かれる二つの事柄の間にも、主たるものと従たるものという関係があるということが感じられる。すなわち、「眼玉がぐるりと光った」の場合、主として描かれているのは、「眼玉が光った」ことであって、「ぐるりと」で描かれる回ったということとは、前者に随伴した背景的なものと感じられる。同じことを並列述語で示した次のbの表現と比較すれば、そのあたりのことは明らかである。

⑩・a 眼玉がぐるりと光った。

⑩・b 眼玉が回って光った。

こうした点を考慮すると、⑩⑪⑫のような表現は、並列に近い意味構造を持ちながらも、情態副詞が述語を背景的に限定している一種の情態性連用修飾とみるのが妥当ではないかと考える（注一四）。こうした情態性連用修飾の構造もあるということとは認識しておいてもよい。

そして、⑩⑪のような構造も、⑩などと同様のものと考えることが出来る。例えば、⑩も一種の情態性連用修飾である以上、やはり、

⑩ 眼玉が光った。——眼玉がぐるり。

のような二句の相関という形に解せられるが、これと同様なら

⑬ 彼が入ってきた。——彼が「おはよう」。

のような二句相関として把握できるのである。ただし、通常的情態性連用修飾や典型的な「引用」の場合とは異なり、⑬⑭などでは、その相関のあり方が、後句の意味するサマが前句の意味するサマに対して背景的に共存するという程度のややゆるやかなものなのである。

このように考えることは、⑬⑭のような構造についての従来の観察とも符合してくる。⑬⑭のような構造は、かなり自由に作れるのだが、大きな制約として、基本的に同一主体的——⑩なら「おはよう」の発話者と「入ってきた」行為者が同一主

体であるように——引用句の発話の発話者と述語用言の行為・状態の主体は同一でなければならなかった(注一五)。従って、㉔・aの意で㉔・bのように言おうとしても、そのような表現は成り立たないのである。

㉔・a 太郎が「おはよう」と言つて、次郎が入ってきた。

㉔・b *太郎が「おはよう」と、次郎が入ってきた。

こうした同一主體的でなければならぬという制約は、㉔を㉓のような二句相関の内的構造をもつ連用修飾と解することの妥当性を示唆するものといえよう。

ところで、㉓などを、

㉓・b 彼は「おはよう」と言つて、入ってきた。

の傍線部の省略とみることが一般にも言われているが、これは、「眼玉がぐるりと光った」を「眼玉がぐるりと回つて光った」の省略だと主張することと同断であると思う。既に検討してきたように、引用されたことばは引用されたものであることにおいて「言った」等の述語的意味を含意し得るものであった。だからこそ、㉓のような表現が自然に解釈されるのである。然るに、「言つて」等の省略と見る見方は、そうした認識を欠いて、引用句に対しては、対応する発話意の述部を是非補つて理解しなければならぬという先入見に支えられるところが大きく、意味解釈を敷衍するものではあつても、構造の説明にはなっていないと思う。

以上、目下の私見の要点は示し得たと思うが、次にいくらか

の補足を行つて全体的なまとめを示したい。

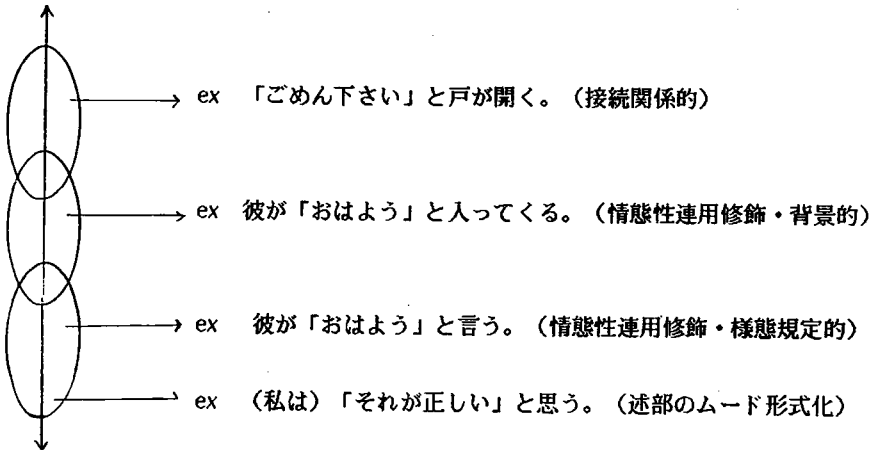
3-4 前二節では、「引用」の主要な構造について見てきたが、以上にふれたものと異なる構造のものもいくらかある。そのうち、ここでは注意すべきものをいくつか採り上げておく。第一に次のような例。

㉕ ごめん下さいと戸が開いた。

この例は、「ト」が発話や思考・認識を意味する述部と結びつかないタイプの一つだが、前節で見たような同一主体性ということが、狭い意味でははっきりしなくなっている。もちろん、「ごめん下さい」と言つた主体と「戸が開いた」ことについての開けた主体は一致すると解されるけれども、表現に即しては、そうした点がはっきりしなくなつて、ただ同一場面で「ごめん下さい」という発話の生起と、戸が開くということとの二つの事柄の並存することが描かれている。こうなると、この構造は、もはや一つの対象についてのサマの側面を二重的に分析したものなどは解しにくい。むしろ、二つの事柄を描く二句の接続構造に近いものとみるべきだろう。そして、ここで想起したいのは2節の用例㉔でみたように、引用されたことばはそれのみで句的性格を帯び得るということである。㉕のような構造が成り立つのは、そうしたことに由来するものといえるだろう。こうした構造は、文における「引用」の構造の一方の極に位置づけられるのではないかと思われる。

これに対し、もう一方の極に位置するのは、

複文的 <引用句と述語の結びつき弱>



単文的 <引用句と述語の結びつき強>

[図 5]

②・a それが良いと思ふ。
 のような例だろう。これは、なるほど形の上では典型的な「引用」の構造と同じだが、bのように置換しても近い意を示すことができる等の点からみて、「ト思ふ」の部分が引用句内部にひきよせられて一種の文末のムード形式に近いものになっているとみることができよう。

②・b それが良いだろう。

つまり、aのような例は、「ト」を介して結びつく二つの用言が一つのまとまりとして述部を形成していると思われる点で、通常の「引用」の構造よりもずっと単文的なのである。

以上のような例も含めて、統辞的な「引用」の多様な広がりを見取り図を上整理しておこう(注一六)。

「引用」の構造は、基本的には情態性連用修飾だが、場合によりさまざまな傾向を帯びて見える。それが、その多様性と複雑さを生んでいるといえよう。

4 以上は、目下の筆者の「引用」の本質論への見通しのようなものである。もつとも、問題は何より副用語論と絡んで、なお考究すべき点が少ない。従って、筆者自身が自分なりの副用語に対する考えをまとめていくことが、必然的に要請される。それは引き続いての仕事だが、ここでは目下の構想を含めていくつかの点にふれ、少し自由に本音を述べてみたまでのことである。

【注】

(一) 例えば、ア・aのような名詞文は、bの省略といえるが、

ア・a 彼が先生。

ア・b 彼が先生だ。

①・aの場合、次のように「ダ」を補うとおかしくなる。

イ*兎がピョンだ。

通常の名詞文とも、はっきり構造がちがうのである。

(二) 山田孝雄(一九三六) S. 91ff.

(三) 過去のことでも、臨場性があれば、こうした表現は可能である。

ウ その時兎がピョン。

ただし、次のような場合は、

エ 兎はいつもピョンだ。

「だ」を伴えることからわかるように、一般的な事柄(「兎はいつもピョンと跳ぶものだ」)を述べる別の表現と考えられ、ここで問題としているものとは異なる。

(四) もちろん、擬態・擬声語といえども、その表現形式と内容の結びつきは、それぞれの言語社会における慣習として決まっているという面がある。けれども、擬態・擬声語は音マネによって現実を写したものである以上、少なくとも当該言語社会においては、表現形式と内容との間にある程度の有契性を感じられているはずである。一言語の言語記号の表現性に関する議論においては、こちらの方が本質的である。

(五) 「ピョン」や「カア」が「跳ぶ」や「鳴く」といった述

語の意味を含蓄するから、含蓄された意味と結びついて叙述内容をふくらますような修飾句(広義)が加えられることもある。

オ 兎が左へピョン。

カ カラスが大声でカア。

なお、こうした「ピョン」「カア」が、その含蓄する述語の意味に支えられて述語的に働くのは、結局、そこで記号列が断ち切られることに依っていると見えよう。「跳ぶ」のような終止形が、自ら文を断止する形であることを示すのに対し、「ピョン」は、そうした働きを積極的に示すものではないと思われる。その意味において、「兎がピョン」「カラスがカア」は、極めて原始的な文体制をとるものといえる。

(六) それは、「くが」といった記号列を承けて、通常の述語の形ではない、一続きの文のような語列が入ってくることから了解されるのだといえよう。その点のはっきりしない文と対比すればよくわかる。

キ・a ヒゲの男が、悪党。

キ・b ヒゲの男が、オイ悪党。

aは、「ヒゲの男が悪党である」意とも、「ヒゲの男が『悪党』と言った」意ともとれる(前者が普通)。しかし、bは、「ヒゲの男が『オイ、悪党』と言った」解釈のみである。「オイ、悪党」の部分が、呼びかけの文を引用したものと直

ちにわかる形をとっているからである。ともあれ、こうした構造の意味解釈は、引用されたことばが来ているという直観に依拠している。

(七) 藤田保幸(一九八六)参照。

(八) 石神照雄(一九八三)S.37f. なお、印刷の都合上、行分けと記号を変えた部分がある。

(九) ただし、厳密にはもう一步二句相関の内実をおさえる必要がある。つまり、「太郎があわただしく食べる」の意味が「5」のように理解されるにしても、「あわただしく」が「食べる」を限定するということがどういふことなのかという点がおさえられなければならない。その点、「あわただしく」は「食べる」を述定する逆述語だとする森重敏・川端善明の把握が参照されねばならないだろう。しかし、現在のところ筆者なりの連用修飾の見方が定まっていないこと、3-13でみるような妙な構造も含めて、自分なりにこの問題を考え直したいこともあって、このあたりを今回はあまり突っ込んでいない。一応、常識的なレベルで足りるように論ずることを試みたつもりである。

(一〇) この点については、既に藤田(一九八六)S.224f.に述べた。

なお、既述のように、引用されたことばは、そのみでそのした発話がなされたことを含意する。つまり、それ自体に「言う」意を含意するものだが、更に⑩のように「言った」

のような述語と相関するのは、そのまま断止して⑦⑧⑨・aのような構造となるより、用言述語文となる文が安定するし、抽象性の高い表現として用い得る故であろう。

(一一) 仁田義雄(一九八二)S.128f.

(一二) 例えば、「思い込む」は「 \sim ト」によってしか補充されず、「思う」も思考内容は「 \sim ト」でなければ表わしにくい。こうした場合、なるほど「 \sim ト」は述語動詞と強く結びついた必須の補語(「格」成分)といった性格が強くなる。ただし、一般に考えられるように、発話や思考・認知を暗示語彙の意味が述語にあることが、「 \sim ト」の共起を指定するものかどうかは熟考を要すると思う。

(一三) 柴谷方良(一九七八)S.83

(一四) もっとも、次のような例になると、引用句で示される発話と、述語句の行為という二つの事柄が共存といっても継起的にずれてくるので、引用句は述部を限定するより、主-述相関全体にかかっていく接続関係の句のようになってくる。

ク 「へえ」と六十のおつや婆さんは、とれてもとれなく
でも、五分間ばかり蠅叩きを派手に振廻すと、帰って来
る。

(尾崎一雄「父祖の地」)

こうした例は、3-14であげた②・aのようなものに連続するものだろう。また、一方では、こうした例と、⑩のような典型的な同時共存・背景の限定の例も連続的で、さまざまなか中間例がある。そうしたあたりの既述が必要となつてこよ

うが、ここではその用意がない。

(一五) 藤田保幸 (一九八六) S.213f.

(一六) 背景的なものと、様態規定的なものの中間例として、次のような例が考えられる。

ケ 「おうおう、いい顔をして」と、集まった祖母の妹達、

三四人のしわ茶婆さんが泣いた。(尾崎「父祖の地」)

引用句の発話と「泣いた」ということが一致するかどうか微妙なのである。

【参考文献】

山田孝雄 (一九三六) 『日本文法学概論』宝文館出版

森重 敏 (一九六五) 『日本文法——主語と述語——』武蔵

野書院

川端善明 (一九七六) 「用言」(『岩波講座日本語 6』岩

波書店)

—— (一九八三) 「副詞の条件」(渡辺実(編)『副用語

の研究』明治書院)

柴谷方良 (一九七八) 『日本語の分析』大修館書店

仁田義雄 (一九八二) 「格の表現形式——日本語」(『講座

日本語学 10』明治書院)

石神照雄 (一九八三) 「副詞の原理」(渡辺実(編)『副用語

の研究』明治書院)

藤田保幸 (一九八六) 「文中引用句『ト』による「引用」

を整理する——引用論の前提として」(宮地裕(編)

『論集日本語研究(一) 現代編』明治書院)

〈付記〉いささか場違いな気もしたが、懇切なお勧めに対し、拙い小論でお応えさせていただいた。筆者自身にとっては、それなりに大切な論だが、とり急いでまとめたための不備は、今後とも補っていきたい。構想の段階で、田野村忠温・丹羽哲也・服部匡の各氏にお聞きいただく機会があったことは、有益であった。記して謝意を表したい。

(愛知教育大学助手)